

巻 頭 言



目に優しいディスプレイ

佐々木 昭夫*

エレクトロニクスを支える多くのデバイスのうちで、表示デバイスは、人（マン）に最も近い位置を占めている。トランジスタ、半導体レーザー等は、装置の中に組み込まれていて、われわれの目に触れない。これに対し、表示デバイスは、いろいろな機械（マシン）と人の境界にあり、マンとマシンの仲立ちをしている。マンとマシンの情報のやりとりには、なくてはならない非常に重要な役割を果している。

私たちが知識を得る重要な手段は、書物を読むということであった。大昔は、蛍雪のほの暗い明かりで書物を読むのに比べて、今は、明るい蛍光灯のもとで書物を読む時代になっている。それにもかかわらず近眼が増え、非常に多くの人が眼鏡を掛けている。マンとは、眼鏡を掛けた動物ともいえるほどである。それは、読まなければならない書物の分量が増し、またその字も和紙に書かれた筆書きの字から、辞書の小さい活字を読むようになったことによる。そのため地球上の文明国といわれる国の人々ほど、眼鏡を掛けないと遠くの物を見ることができなくなってしまった。

今の社会の移り変わりをを見ると、書物に向かい合う時間よりも、いわゆる表示デバイスに向かい合う時間のほうが長くなっている。仕事をするときも、テレビを見るときも、ゲームをするときも、もはや書類、書物でなく表示デバイスである。そこに何か新しい目の障害を人にもたらはしないかと危惧するものである。

たとえば、原色に近い一つの色、仮りにそれを真赤な色だとし、その赤色だけによるディスプレイを長く眺めると、その色に対する視神経感度が鈍ってくる。したがって、目を他に移すと、その景色が補色を帯びて、すなわち緑色掛かった色に見える。単に、近眼という焦点調節の困難を来すというだけでなく、目の視神経感度のいびつな人が生まれて来はしないかと危惧するものである。

ディスプレイには、注意を惹き起こすためのものと、長く眺めるためのものがあり、その両者には、自ずと大きな違いが必要であろう。前者には、目に厳しいディスプレイであることが望まれ、後者には、目に優しいディスプレイが必要ではなかるうか。色の感覚のおかしな人の集団が、この地球上に現れてこないためにも、これからの新しいディスプレイの実現には、十分な気配りをお願いしたいところである。

* 京都大学工学部電気工学教室 〒606 京都市左京区吉田本町